学校法人日本工業大学創立90周年 N.I.T.90

日本工業大学 通信

NIPPON INSTITUTE OF TECHNOLOGY

第89号

平成10年（1998年）1月1日発行

編集・発行
日本工業大学
広報課
〒345 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
☎(0480)34-4111(代)
http://www.nit.ac.jp

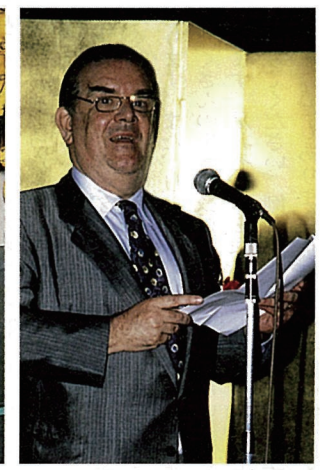
本学の産学協同事業スタート
ベカルト社と新会社設立

柳澤教授開発の金属繊維製造技術を製品化

昨今、産学協同の、より一層の推進が待望されるなか、昨年十月末、本学とベルギー・ベカルト社との間で、産学協同事業がスタートした。

目的は、あくまで「理論実践」を掲げる本学の研究推進にあり、協同事業の内容は、わが日本工業大学とベルギー・フランダース州に本拠を据え、世界二十カ国以上に六十余りの生産拠点を有するベカルト社とが「ベギニット」社を設立（東京都千代田区、ポール・ハイゼントライト社長。資本金二億円）。本紙でも折々紹介してきた機械工学科・柳澤章教授が開発した「樹脂コーティング金属コイル切削法」による金属繊維製造技術を活用。これまで難しかった金属繊維の用途と市場の拡大を図るというものだ。

左より柳澤教授、大川理事長、ベカルト社のハルメッツシュ副社長



▲学内の開発室を視察するベカルトのハーマー副社長（中）および合弁会社のハイゼントライト社長（右）▶設立パーティーで祝辞を述べる駐日ベルギー大使。

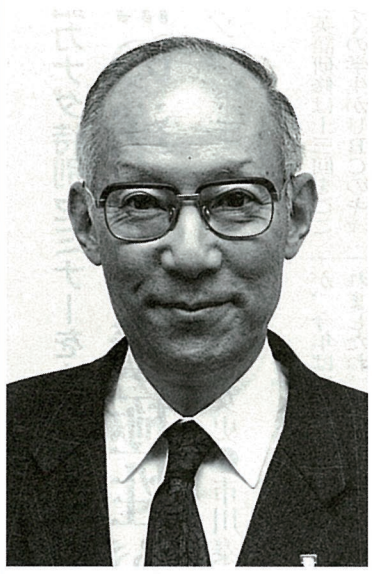
ちなみに、柳澤教授の金属繊維製造技術は、巻いた薄い金属板に金属同士が付着するのを防止する樹脂コーティングを施し、切削後に湯を通すことで樹脂を落とすというもの。この方法によって、これまで金属を何度も引き伸ばす「集束伸線法」による製造に比較して、安価かつ短時間なのが特徴。さらに集束伸線法のように金属繊維を酸に通す工程が不要なため、酸に弱い金属の繊維化も可能という大きなメリットがある。そこでベカルト社は、同技術の商業化が可能と判断。本学にとっても「理論実践教育」を標榜する立場から協同事業に踏み切った、というわけだ。

なおベギニット社の手がける本製品の開発室は、すでに学内の一画に開設され、最大で年産百トンの金属繊維製造ラインも導入されているが、本格生産は、この年頭より開始される運び。金属繊維の種類は、ステンレス鋼をはじめ、銅、ニッケル、チタン、アルミニウムなど、これまで低コストでの繊維化が難しかった金属の繊維化を手がけてゆく計画である。

ついでながら新会社は、すでに昨年五月に設立をみているが、十月二十八日の夕刻、東京會舘にて駐日ベルギー大使をメインゲストに、関係者約百五十名が列席し、設立パーティーが、華やかに催された。

頌春

新たな目標と課題に向けて



神馬　敬 学長

明けましておめでとうございます。昨年は本学園創立九十周年記念行事へのご後援とご協力ありがとうございました。

学内の体育館を会場とした質素な記念式典と祝賀会でしたが、内外のお客様よりご祝辞と本学の教育研究施設について貴重なご意見を頂戴できて誠に幸いでした。

特に工業技術博物館は日本機械学会の創立百周年記念式典で表彰を受けたばかりでしたが、他大学からも本博物館を利用した実物教育に参画のご提案があり、実行方を協議中です。

記念体育・文化行事の表彰式二十名の学生による大演奏は、日工大の学生のもつ多方面の才能を示したものと喜んでいます。

九十周年を終えた次の目標はこの勢いを百周年まで続けること。そのために中学・高校・大学一貫の工業教育の推進という日工大の建学の精神を再確認して、さらに実績を上げることを心掛けねばなりません。

まずは、産学交流の推進です。昨年のヒットは薄板コイル材を切削して金属繊維を製造する研究開発でしょうか。従来法に比べ、十分の一の低コストで各種金属を髪の毛より細い繊維に加工できる技術です。ベルギーのベカルト社より企業化の申し入れがあり、新たにベキニット社（ベカルトとNITの合併会社）が設立されました。

ベカルト社は有刺鉄線の開発で著名な世界の金属繊維業界をリードしている多国籍企業です。ベキニット社の発展を祈るとともに、今後も本学園で開発される新技術が次々と企業化されて、研究の成果を社会に還元できることを期待します。

次は教育問題です。日工大の卒業生はこれまでに約一万八千名ですが、中学技術科と高校工業科の教員になった者が九百名もおり、勤務校での評価が高い。これはかれらが工高、大学を通じて技術を体で覚え、実技指導ができるからで、本学卒業生ならではの特徴です。これから先、工業教員の欠員が急増する時期が迫っており、日本の工業教育にブランクを作らないためにも、日工大は工業教員養成に一層の努力が必要と考えます。

また、日工大が基礎を置く工業高校のカリキュラムは大きく変化しようとしています。これまでは入学生の大部分が工業高校での実験実習製図を通じて技術を体で覚えているという前提でカリキュラムを組んできました。この前提が通用しない学生が増えそうだということです。

技術に対する感性をもち、設計と製造の即戦力となる人材養成の伝統を守るため、現在、普通科の卒業生のみに行っている補習の対象を広げることも検討しなければなりません。

国際化時代に適合して、工学部卒業生の質的保証を目的とした認定制度の実施が（社）日本工学教育協会で検討され始めました。教育の成果についての学内のチェック機能が一層重要になります。本学では二十年前から年次要覧を発行して教員の研究業績を公表してきましたが、教育業績の評価についてはさらなる検討が必要と、今年も何かと課題の多い年となりましょう。

本学園創立九十周年記念行事の締めくくりは、来る二月二十四日開催の技術教育国際フォーラム「感性と工学」です。二十一世紀の新たな学びの座標の模索が趣旨ですが、皆様のご参加を願って年頭の挨拶といたします。

自動車部が7連覇達成!!

ホンダ・エコノパワー燃費競技大会で抜群の実力発揮

応援に駆けつけた先輩達も、ひと安心。

実績とマナーの良さでわが日工大が誇りとする自動車部が、さる十月十九日に開催された《第十七回ホンダ・エコノパワー燃費競技大会》大学の部（参加校八〇）で、みごと栄えある七連覇を達成した。

参考までに、本学に次ぐ六位までの名を列挙すると、名城大、理科大A、国士舘大、早稲田、理科大Bの順。そして、わが日工大チームの燃費一一八九・八七五km／リットルと二位の名城大とのその差を比べると、実に三〇四・七八四km／リットルと大差があり、まさに〝断トツ〟の制覇ぶりであった。

それだけではない。同部はまた、同月二十六日に行われた昭和シェル石油のそれでも、社会人チームの中で六位大学一位に入賞。実力の程を示した。部員諸君、今年もその意気で！

技術教育国際フォーラム協議会が発足!!

中央教育審議会会長の有馬 朗人先生らが委員に

このたび発足した技術教育国際フォーラム協議会の目的は、会則第三条において「本会は高度専門技術者の育成に関する教育の振興・開発について国際的視点から協議を行い、我が国における科学技術の向上を図るとともに世界の科学技術と人類社会の持続的な発展に貢献することを目的とする。」と定める。

本協議会の代表は大川陽康本学園理事長。協議委員には、有馬朗人中央教育審議会会長はじめNHK解説主幹の小出五郎氏など各界の有識者、国際委員として中国華中理工大学周済校長などが名を連ねる。今後は、二十一世紀における技術教育の在り方のフォーラムやワークショップの開催などを予定。去る十一月十日に第一回の協議会を開催したが、席上、有馬先生からは「専門教育を中高一貫で、専門高校の子供達がワァッと大学に行けるようにしたい」と本学および当協議会への期待の挨拶をいただいた。なお、二月二十四日の国際フォーラム「感性と工学」に強い関心がよせられた。

会合で抱負を述べられる有馬先生

技術教育国際フォーラムのお知らせ
テーマ：感性と工学

●平成10年2月24日(火)
13:00～17:00
●会場：東京国際フォーラム(ホールC)
参加費：無料

■基調講演：①日本人と感性／有馬朗人②工学と発想／吉川弘之③世界の工学教育における諸問題／W.M.ボーナー
■パネル討論：「感性と工学」をめぐって／河合隼雄、黒田玲子の両氏に、基調講演の三氏が討論に参加致します。

問い合わせ：日本工業大学 工業教育研究所内
技術教育国際フォーラム協議会 0480-33-7512

現地座談会

◇英会話カナダ特別セミナーをめぐって――

事前の準備と積極性が肝要

●ジョン・レッドモンド氏●ジャス・ジル女史●市川泰弘助教授

昨年で十四回目を迎えたカナダ英語研修は十三回をここUBCで行ってきた。その間多くの学生がUBCのキャンパスで英会話の授業を受け、さまざまなことを経験してきた。今回、UBCの生涯学習センターの語学研究所のスタッフであり、日本工業大学のプログラムの責任者であるジョン・レッドモンド氏、ジャス・ジル女史とこのプログラムに参加した日本工業大学の学生についてお話を聴く機会を持つことができた。（市川）

左より市川助教授、レッドモンド氏、ジル女史

市川　今回は座談会に参加してくださってありがとうございます。まず、はじめに今年の日本工業大学からの学生についての印象を聞かせてください。

レッドモンド氏　私はここでは学生たちに数回しか会っていませんが、彼らはとてもエネルギッシュで、そして恥ずかしがらない、という印象を持っています。この二つのことは語学学習にとって非常にいいことです。そして彼らはどんなことでもトライすることが好きだと思います。たしかにクラス1の学生の語学力はかなり低いといえます、しかしクラス2の大半の学生はとてもよい英語力を持っています。おそらく今まで来た学生の中で一番高いのではないかと思います。

ジル女史　そうですね、クラス2の学生の大半はいままでの学生よりも英語力は高いといえます。通常、クラス分けをしてもほぼ同じレベルになっていたのですが、今年ははっきりと分かれましたね。クラス分けテストでも非常に高得点をとる学生もいました。それで以前にはできなかったような上級のクラスで使うような教材を使って演習ができるようです。

市川　実は今年は以前に比べて日本でのプログラムを早くスタートさせました。学生たちはカナダ研修の勉強を四月の終わり頃からはじめ、UBCから送っていただいたプログラムについてとホームステイについての教材を使って学習しました。あいにくこのプログラムはいろいろな学科の学生が参加するため、学生のスケジュールが非常にきつく、毎週決まった時間にガイダンスをすることができず、学生たちは週二～三回昼休みを利用して勉強をしました。従って、時間の都合で出席できる時とできない時ができてしまいました。

レッドモンド　それでは昼食を食べながらおこなったのですね。

市川　そうです。

レッドモンド　それはとてもよい準備をしてくれました。それが今回の差となってでてきたのでしょう。

ジル　準備のためにどのような教材を使っていたのですか？　特別に日本工業大学がつくったものですか？

市川　そうではありません。最近日本の教材はいろいろなものが出始めています。それらの教材から、いくつか選び出し、ある状況ではどのような使い方があるのかを学生は学習しました。例えば、空港でとか入国審査ではどのような表現があるのか、ホームステイではどのようにしたらいいのかなどです。

レッドモンド　ビデオなどの教材は有効だと思いますか？

市川　そうですね、有効だと思います。

一人で街なかを歩くことが会話能力の向上に役立つ

市川　今回とても驚いたのはたった一週間で学生の英語力が非常に向上したことです。

レッドモンド　彼らはとても自信を持っています。バンクーバーの環境によって彼らはさらに英語の練習をすることになりますし、クラスでは先生から、またホームスティではホストファミリーからフィードバックをうけることになりますからね。日本では実際の状況の中で英語の練習をすることはできませんが、ここでは町の人々もいろいろと英語で教えたりするので、実際の状況での英語の使い方を継続して学習できるわけです。

ジル　昨日、ディスカッションのクラスがあったのですか、クラス1の学生は前もっていくつかの質問を用意してきました。もし、ある表現がうまく伝わらなかったときには別の表現を使って自分の意志を伝えようとしていました。これは彼らが内気ではないからだと思います。それに自分の言いたいことを伝えたいという気持ちがとても強いのでこれが語学力の向上に結びついていると思います。

レッドモンド　男性は女性に比べて間違いをするのをいやがりますね。それが英語力の向上の障害になることがあります。カナダ人でも間違った表現をすることがあるのですから、気にせずに積極的に話をすべきです。

市川　日本工業大学では新カリキュラムに移行し、英語教育も改善されつつあります。以前は一クラス五十～六十人もいて読解や文法、作文を教えなければなりませんでしたが、新カリキュラムでは、一年生の時に一クラス四十人程度に押さえて基礎的な読解力をつけるよう心がけています。また、新学科（情報工学科）では一年次に読解（二時間）文法・作文（一時間）、英会話（一時間）を一週間に学習しなければ成りません。この結果学生の英語力が少しですが向上してきているのではと考えます。教材という点でカナダでよくつかわれ、推薦できるようなものなどはありますか。

レッドモンド　カナダにはたくさんのELSの教材があります。また、UBCにもたくさんの生きた教材があります。是非それらを使ってみてください。例えばビデオなどもありますし、ホームページにはたくさんの教材に関する情報や世界各国の言語研究所のデータもあります。特にハンドブックはとてもよくできていますから、それを用いるのがとてもいいと思います。

ジル　特にこのプログラムでは学生のレベルに会わせて様々な教材を使用しています。今回使った教材のコピーを後でお渡ししますので、それを参考にして教材を考えていけばとてもよいと思います。それにレッドモンドが言ったようにハンドブックを有効に使うといいと思います。その中にはホームスティでの過ごし方ばかりでなく、たくさんの表現も含まれています。

レッドモンド　UBCではバンクーバーの紹介を含めたUBCの語学教育に関するビデオを作成しています。これはすべて英語で紹介されていますので、ヒアリングの練習にもなります。是非活用してください。

市川　ありがとうございます。最後に残りあと一週間ほどありますが、学生たちに期待することがありましたら教えてください。

レッドモンド　まず、ホストファミリーの人々に親切であることを望みます。そしてできるだけ多くのことに参加してもらいたいです。これは教師が連れて行ったりするのではなく、自分で美術館やダウンタウンやその他いろいろなところへ行き、カナダの人々と会話をしてほしいです。そして行くときはグループで行くのでなくできるだけ一～二人位で行くことです。カナダ人はグループで動くことを嫌います。少人数でまだ行ったことのないところへ行くことが英語学習にとても有効になると思います。もっとも今回の学生はもういろいろなところへ行っているようですが。

ジル　私も同じ意見です。私も学生たちにもっとホストファミリーや他の人々とできるだけ多くの機会を見つけて話をし、多くの人と知り合いになってほしいと思います。

市川　実際にこの研修をきっかけにカナダに英語の勉強に来るようになった卒業生もいます。学生たちが同じようにこの研修によって国際的な人材となり、さらにいろいろな可能性を見つけてほしいです。今日はどうもありがとうございました。

レッドモンド・ジル　ありがとうございました。

◇　◇　◇

今回の座談会で感じたことは本学の学生の英語のレベルが徐々にではあるが高くなっていること、また、このプログラムに向けて事前のガイダンスや英語能力の訓練がさらに学生のレベルをのばせるということであった。現在、多くの分野から学生は英語力を求められつつある。この研修をさらに充実したものにし、かつ、大学での英語教育の方向性も検討していかなければならないと実感した。

（注）当座談会は、昨夏の研修中に行われたものですが、紙幅の都合で本号の掲載となりました。（編集部）

高原町子君に建築学会卒論賞

直江津の擬洋風建築の生成と発展及び変化過程をみごとに解明

九七年三月に本学建築学科を卒業した高原町子君の卒業論文が、日本建築学会優秀卒業論文賞のひとつに選ばれ、九月一三日の日本建築学会大会において表彰された。論文の題目は「直江津の擬洋風建築・いかや旅館を中心に」である。

高原君は、自分が生まれ育った直江津（新潟県上越市）の町に擬洋風建築が数多く存在したことに興味を抱き、さらにそれが急速に失われてゆくことを惜しんで、波多野純教授の下で卒業論文をまとめた。主題とした「いかや旅館」は、明治三三年に地元の大工・渡辺源吉によって建てられた擬洋風建築で、八角塔をもつ特徴的な外観は直江津駅前のシンボルとして親しまれてきた。擬洋風建築とは、幕末から明治時代に西欧から洋風建築が伝えられたとき、日本人の大工が自らの技量と知識でそれを吸収し、洋風建築に似せて造りあげた建物である。現地に通い、たくさんの方から話を伺い、古写真やスケッチを集め、論文も何度も書き直した。

高原町子君

審査員の講評は、以下のようである。高原君の論文にかけた情熱が審査員の心を打ったことをよく示す内容なので、再録する。

「本論文は直江津の町並みに感動した著者が、その擬洋風の建築群を、特に傑出した「いかや旅館」に焦点をあて、その建設時の時代背景、施主の擬洋風建築への思い入れや思考、大工を探り、さらに施主に影響を与えた長野県の類似建築やドイツ人などとの関係を明らかにし、見事に直江津という一地方の擬洋風建築の生成と発展、変化過程を解明している。論文のまとめ方には改良の余地があるが、テーマの独創性、調査の積極的取り組みや内容の深さが高く評価でき、今後の発展が期待される」

高原君は、現在住宅系コンピュータ会社に勤務し精力的に仕事に取り組んでいる。また、歴史的な町並みや建築に関する興味はさらにふくらみ、休日には博物館などに通っており、やがては博物館学芸員の資格を取ろうと、大学の通信教育の講座にも入学した。彼女の活躍に期待したい。

アジアの文化遺産フォーラム本学にて開催!!

さる十二月八日、学友会館にて、（財）ユネスコ・アジア文化センター及び本学主催によるフォーラム《アジアの文化遺産と国際協力》が開催された。

テーマは、多くの貴重な文化遺産の中でも、特に自然災害や人為的被害によって崩壊の危機にさらされているネパールのカトマンズ渓谷、及びヴェトナムのフエの二ケ所をめぐって、保存修復のための国際協力の在り方を考えようというもの。講師は「カトマンズ渓谷」を本学建築学科の渡辺勝彦教授が、また「フエ」を早稲田大学政経学部の坪井嘉明教授が務め、参加者との間で熱心な討論が繰り広げられた。

当フォーラムの詳細は、次号で報告致したい。

平成10年度一般入試

即戦力のエンジニアを育成する
工業高校生の学園

学部	募集人員	願書受付	試験日	合格発表
工学部	機械工学科　（200名）	1月8日～1月31日	2月6日	2月15日
	情報工学科　（140名）			
	電気電子工学科　（200名）		2月7日	
	建築学科　（200名）			
	システム工学科　（160名）		2月8日	

●お問い合わせは●日本工業大学　教務課入試係
〒345　埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4－1　☎0480－33－7507（直）

年頭所感

目的意識の再確認とさらなる研究の活力を

理事長――大川　陽康

学生諸君およびご父兄の方々、ならびに教職員の皆さん、明けましておめでとうございます。

昨年四月に始まった学園創立九十周年に因む諸事業も、余すところ、この二月末に東京国際フォーラムにて「感性と工学」をテーマに行うシンポジウムのみ。この間学園が、また新たな第一歩を踏み出すに際して執り行った事業に対して、とくにご父兄の皆様方には多大なお力添えを賜り、ここに深く感謝申し上げる次第です。

さて、年頭に当たり、私が学生諸君に改めて申し上げたい事柄は、何はともあれ、入学時に抱いた「夢」、あるいは「目的」を、今一度、はっきりと再確認して、日々の学習に取り組んでほしい、ということであります。

いうまでもなく、大学という場は、学問をする所であります。しかし昨今は、ともすると、その当然の姿が見失われがちです。と言って、ただやみくもに勉学に取り組め、というのではありません。前言したように、その前提には、当然ながら自分が定めた「夢」や「目的」が存在しなければ、実社会で役立つ知識や方法の習得などおぼつきませんし、また世が期待する独創的技術をものする素養など、育みようがありません。

すでに就職の決まった諸君も、例外ではありません。卒業までの残された期間に、専門分野の知識に一層磨きをかけ、企業の目指す方向に即して、自分をどう生かせるか、はたまた何がやりたいかを、はっきり固めておくに越したことはありません。

むろん当初は、希望の部門で働くことなど適わないかもしれません。けれども、世の中とは不思議なもので、目的意識を持って努力していさえすれば、チャンスは必ずめぐって来ますし、また、その意欲を認めてくれる人は必ず存在します。ゆえに、学年を問わず学生諸君全体が、以上のような心組みで学習に取り組んでほしい、というのが、私の切なる願いです。

一方、教職員の皆さんには、従前に比べて一段と教育環境が改善されつつありますが、教育面の活力向上は当然ながら、今後は研究面の充実に、より一層、意を注いで頂きたい、と念願してやみません。

ご承知のように、本学園は、一昨年より「独創的工業技術者の育成に関する研究」に、鋭意取り組んでおりますが、それを実のあるものにするためには、やはり教職員自ら範を垂れることが肝要だからであります。

さいわい昨年は、研究成果の一つである金属繊維製造技術に基づき、国際的な鉄鋼メーカーとして知られるベルギーのベカルト社と、協同事業をスタートさせることができました。しかしながら、昨今つよく産学協同研究の推進が要請される中、それにつづく研究成果が望まれますし、また、その活力が漲ることこそが、理論実践教育を旨とする学園を、確固たるものにすると信じて疑いません。

この一年の皆さんのご健闘を、つよく期待致します。

就職戦線'97

求人は対前年比16％増の４千社以上から

志望動機や自己表現などの就職活動の基本を怠るな!!

就職協定廃止元年にあたった九七年度の就職戦線は大学側も企業側も手探り状態の中で始まった。

都内の大学では、早めの採用計画を決定した一部の企業名が報道されると不安にかられた多数の学生が就職課に殺到。臨時就職セミナーを急遽開催した大学も数多くあった。

本学においては、協定が廃止されても学生個々が行う就職活動には何ら変化は無く、自己分析に基づいて、何をやりたいのか、何ができるのかを優先して企業選びをするように指導した。

このような、状況下で始まった今年度の学生達の就職活動をみると、訪問した企業数は五社以上が四六％（昨年は五一％）。その企業群の中から、社風、仕事の内容、将来性などを検討して応募する企業をしぼり込んだわけであるが、応募した企業数においても昨年と数の上では大差はなく、一社と二社が半数近くを占めていた。

また就職・採用活動の自由化は当初重複内定者の増加を生むであろうと懸念されたが、重複内定者は二八％で昨年より一％上昇しただけで、心配したほどではなかった。

ちなみに今年度の学生の就職活動を数字のみで判断すると、平穏な状態で過ぎようとしているように感じられるが、決して内定を得るまでの道のりは平坦なものではなかった。

幸いなことに、本学には昨年より十六％増の四千社を越える企業からの求人があった。

しかし、これは企業の採用門戸が広がったことに結びつくものでは無い。不況風の中、長期間にわたって続いたリストラのために企業の人員構成に歪を生み、これを是正しないと企業経営に支障をきたすと判断し、このために再開した採用増であった。

すでに企業の多くは、四月に一括採用した新規学卒者を長期間にわたり教育して行く時間的余裕が無くなりつつある。そのために即戦力となる中途採用を適宜行うと同時に、新卒者に対しては、職業観、潜在能力など時間をかけて見極めることに採用のポイントが移りつつある。そのために志望動機、自己表現などの就職活動の基本を怠った学生にとっては、厳しい結果となっている。

このように企業は学生個々に対して面接の回数を増やし、人物評価を重視しつつ厳しい選抜を行ったわけであるが、企業はここ数年、数々の課題を与え、学生の多様な能力の側面を観察しようとしている。

選抜方法の傾向を学生のアンケートをもとに昨年と比較すると、適性七％、一般常識六％、論作文五％とそれぞれ増加している。

就職課を訪れて来た学生に入社試験について聞いてみると、一般常識、特に時事問題が苦手であると多くの学生が語っていた。

企業の採用担当者も、時事問題などで完璧な解答など、あまり期待はしていないようだ。従って、むしろ世の中の流れにどの程度の関心を持ち、若い感性でどのように理解しようとしているかを試されていると思えばよいのではないか。

先日各学科の三年生に就職ガイダンスを行った。その中で四年生に内定を得るまでの体験談を話してもらったが、一様に時事問題や経済問題に注意をはらい新聞を丹念に目を通し、時には自分なりの感想を記し、文章力を養い、苦手を克服していったことを語ってくれた。

そして、体験談の結びの言葉として、自分の志望した企業に一般常識や論文が課されていても敬遠せずに挑戦して下さい、と励ましの言葉を添えてくれた。

果して、四年生の言葉を心のより所として後に続く学生が、どのように健闘してくれるか、その成果が出る頃を楽しみにしたい。

九七年度の求人状況は、九月頃までの景気回復ムードを反映して工作機械、輸送機械、精密機器、半導体、回路設計、ソフト開発、住宅産業等の業種から着々と内定を頂いていったが、いわゆる三K業種からは多くの求人があるにも拘らず、採用に結びつくまでに至っていない。

今年度の就職活動で一番頭を悩ませたのが、Uターン希望の学生に対する対応であった。

就職課の資料だけでは充分にカバーできない場合がある。このような不利な条件の中で早めに活動を始め、学業と就職活動を上手に折り合いをつけ積極的に地元企業の説明会等に出席した学生は、ほぼ希望通りの結果を得られたようである。

今年度の就職活動に先立ち、就職課では世の中の流れに迎合せずに、また学生の不安感を煽るような言動を慎み、腰の座った就職活動をするように促した。

そのため、学生は、企業との出会いの場を多く持ち、第一志望の企業から七四％（昨年六二％）の学生が内定を得ていた。

これは、学生が社会の変化に上手く対応して就職活動の基本を忘れずに活動したことの現れであろう。

協定廃止を契機に、本学も就職活動を正規のカリキュラムの中に取入れ、実学として体系化する必要があるのではないか。学生が仕事や企業について学び、正しい職業意識を持つことは、世評に流されず、自分に適った職業を探す出発点となるからだ。

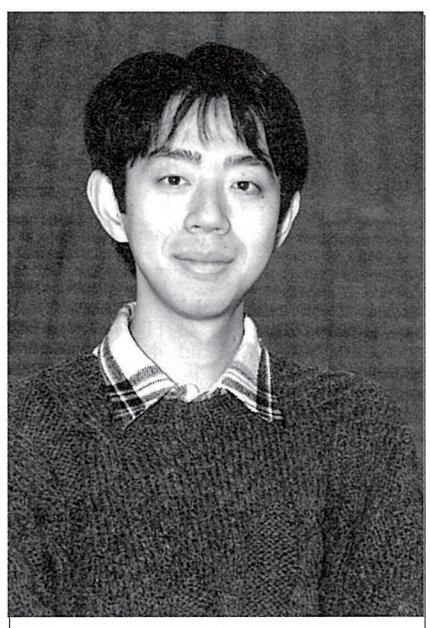
なお三年生諸君は、すでに就職活動のさなかにある点を強く認識して、ことに取り組んでほしい。

STUDENT face '98

新・学生自治会中央執行委員長　保高　正幸君

（電気電子工学科３年）

■大学と学生のパイプ役に!!



昨秋、早稲田大学の学園祭の中止が新聞紙上を賑せた。学園紛争を知っている世代には学生自治会というと、どうしてもそちらのイメージがつきまとう。しかし、今ではそのようなアクティブな活動を行なっている自治会は極めてまれである。平成十年度の日本工業大学学生自治会中央執行委員会（中執）の委員長となった保高正幸君も、中執の役割を「大学と学生とをつなぐパイプ役」と答えた。

日工大には学部生、大学院生をあわせて四千五百人余の学生がいる。これだけの数が一日の大半を過ごしていれば、学食のメニューから授業の進め方にいたるまで様々な不満が生ずる。年二回の学生総会でそれらの意見を吸い上げて大学へ要望として提出する。これが中執の重要な仕事だ。

中執は総会で出てきた意見をすべて大学に持ってくるわけではない。大学と自治会の対立構造はなくなったとはいうものの、そこはやはり交渉事、駆け引きが必要だ。総会ではさまざまな意見・要望が出されるが、互いに相反するものも少なくない。例えば、学内の灰皿を整備するかあるいは学内全面禁煙にするのか、といったあちらを立てればこちらが立たずといった問題。また学生駐車場についての交渉では、拡大を望む学生たちと自動車通学にいい顔をしない大学の間で十年を経た今でも未だ解決を見ない。

これら多数の団体から出される色々な意見を、最重要事項としてみたり、あるいは来年に見送ったりして、なんとか皆が納得できるような要望書を作り上げるのが、中執およびその委員長の手腕である。

また中執が主催する行事も多い。今年は一月十六日に行われる「学内成人式」。新入生対象のクラブ紹介を中心とした「オリエンテーション」、学園祭期間に行われる美術展「秀麗展」、春と秋の「講演会」などなど。学園祭や盆踊り大会のように中執の後押しを得て行われる行事まで数え上げたら枚挙にいとまがない。

保高君自身は、今まで中執の企画局員としてこれらの行事を執り仕切ってきた。こういったイベントを企画して、その参加者が予想以上に多かったときの喜びはひとしおであるという。

近年はこういったイベントの企画も難しくなってきた。クラブ活動にも参加せず、学内の行事に関心を持たない層が増えつつあるからだ。

それに対し、彼はこう語った。学生全員のクラブ団体への加入が目標でもないし、学外で楽しみを見つける学生が多くなってきているのも時代の流れでやむを得ないと思う。しかし、せっかく日工大に入ったのだから、ぜひ大学で友達をたくさん作って欲しい。自分も自治会活動を通じて、腹を割って話をすることのできる仲間がたくさんできた。これは何物にも代え難い。

たまには他校の自治会を訪れることもあるようだ。大学の御用機関のようになってしまっている他校の自治会に比べると、自分たちには自己の判断で行動をする「自由」があると感じるという。

委員長になってからは、自分で判断する責任の重みで苦しいこともある。しかし、一般の学生や中執の後輩たちには、存分に学生生活を楽しんだり、自治会活動を楽しんでもらいたい。

これが彼の中執委員長としてのモットーである。

吹奏楽団が定期演奏会で多彩なサウンドを披露!!

学内行事に、いつも彩りを添えてくれる吹奏楽団が、十二月六日の午後五時半より、春日部市民文化会館大ホールにおいて、「五色が織りなすコンサート」をメイン・テーマに、第十四回定期演奏会を開催。聴衆の喝采をあびた。

演奏は三部構成で、ポピュラー、クラシック、映画音楽にわたって十一曲が華やかに披露されたが、なかでも、あのダイナミックなテンポで展開する『新世界交響曲』（ドボルザーク）の第四楽章のそれは、迫力満点の演奏で、多くの人々を魅了した。

また、映画『男はつらいよ』や、空前のヒットとなった『もののけ姫』の主題曲の演奏も、幅広い人気を集めた。このように、今年の定期演奏会は、大人も子供も楽しめる多彩なプログラムに特色があったが、より地域民に親しんでもらうための選曲の工夫に、大きな拍手を贈りたい。

なお後援には、春日部市教育委員会／宮代町教育委員会／埼玉県吹奏楽連盟／テレビ埼玉が名を連ねた。

学園創立90周年記念祝賀会
新たなる発展を期して開催
アジアの学術協定校から多数の賓客

好天に恵まれた十一月九日、学園創立九〇周年の祝賀会が、体育館を会場に、理事長以下学園関係者と大学・高校の同窓会、後援会等を始めとする外郭団体、海外の各協定校、他大学、ご寄付をいただいた企業など合わせて約九五〇名の参加を得て、盛大に行なわれた。

神馬学長の開会の辞に続き、大川理事長からは、学内外の関係者に対する御礼に始まり、学園の実学を伝統とする九〇年間の歩みと現況及び工業技術教育を通じて、社会にさらに貢献してゆくため、二十一世紀に対応できるグローバルなエンジニアを育成すること。このため、学園は、力を合せて努力していきたい旨の挨拶があった。

続いて登壇いただいた各海外協定校の代表の方々―台湾・高級工商職業学校校長、中国・華中理工大学校務委員会首席、台湾・高苑工商専科学校董事長、タイ国・キングモンクット工科大学学長秘書、台湾・南台技術学院国際貿易学科主任、台湾・国立交通大学校長の紹介があり、大学後援会、大学工友会、付属高校・中学後援会、東工学園同窓会、NITEC埼玉産学交流会から寄贈の三個の四斗樽の鏡を開き、付属高校・中学の小野校長による乾杯となった。この乾杯に使われた桝は、九〇周年にあやかり、九勺桝として付属高校生徒により作られたもので、好評であった。

祝賀会は吹奏楽団による演奏も交え、終始なごやかな雰囲気のなか約二時間、竹内理事の中締めで終了した。また、当日記念品として、学園の鋳造施設で製作された、校花である梅をモチーフにデザインされた文鎮が、参加者全員に配布された。

写真上＝体育館での祝賀パーティー風景。中＝遠来の学術協定校の代表諸氏。下＝工学院大学の理事長（右から二番目）など、他大学の来賓の方々と歓談する神馬学長

近事片々

OB便り

ヒントを求めての"母校通い"の思い出

藤沢　雅憲
電気電子工学科（4期生）
ローム(株)生産本部統括部長

私は昭和四十九年に電気電子工学科を卒業致しました。

現在は、京都にある電子部品メーカーのローム株式会社に勤務しております。

私も多くの学生がそうである様に、工業高校の出身です。そして今から思いますのは、大学の教務部長・電気電子工学科教授であります廣瀬治男先生に大変にお世話になったという事です。

現在では、ビジネスマンの転職にそれ程抵抗はありませんが、廣瀬先生のアドバイスと実際に動いて頂いたことがなければ、今の自分はなかったであろうし、また違った道を歩いていただろうと思われるからです。

廣瀬先生とは確か、二年生の時の「半導体素子」の講義を受けたのがきっかけで、卒業研究の時も先生の下で研究させて頂きました。また、英語や数学でわからないことがあった時でも、よく先生の研究室に伺い、お話しをお聞きしたのを今でもよく覚えております。

この様な私ですから、今でも廣瀬先生と連絡をとらせて頂いております。

私は卒業研究が「インバータ」であったこともあって、就職は埼玉の電源メーカーを自ら探して、ここに七年間勤務しました。この会社は、私が退職した二年後に倒産しましたが、私にとっては今から思うといろいろ経験させて頂いた期間でした。というのも、この会社はなったことで、「人」を中心とした物づくりを考えるようになりました。

数年後、私はこの会社の限界を感じ、群馬県にある東京三洋電機の半導体事業部に廣瀬先生の紹介で入社させて頂きました。今では半導体が搭載されていないセットはないと言われる位この分野の産業は競走が激しく、技術進歩も著しいものです。

私がこの半導体、いわゆるLSIの開発の仕事に従事することになったのは「本当にラッキー」そのものでした。この開発に従事している間、特許出願や売り上げに貢献できた事は本当に周囲の方の協力があったからです。システムや回路で不明なことがありますと廣瀬先生の所へ「ヒント」を得によく大学へ行ったものでした。

私は主にバイポーラのリニア回路を担当しておりましたが、市場の動きや今後のシステムの事を考えると、今では普通になりましたが、リニアとデジタルの混載が主になると予想していました。

しかし、部署が細分化されていたため、世の中の先を捕えて開発、設計することは難しく、今の状態では先細りをするのではと感じていました。そんな時、コンペジターである「ローム」から声がかかり、いろいろ幅のある仕事が出来るということで思い切って東京三洋電機を退社致しました。四十歳の時のことでした。

現在、「ローム」のモジュール生産本部に所属し、半導体を使ったモジュール商品の企画も含め、生産部門全体をマネージメントする立場におります。自分の特質を生かしながら、皆と協力して成果をあげることが出来るよう心がけております。

スチューデントセンターで行われた記念歌入賞作品の発表会

工業教育記念館が長い歴史に幕を！
新たにゲストハウス建設

かつて全国工業高等学校校長協会の工業教育会館として使用され、昭和44年(1969)年に本学構内に移築。その後、工業教育記念館／工業教育研究所として機能してきた建物(写真左)が、先月、姿を消した。跡地には、新たにゲストハウスが建設される運びだが、ここにその馴染みの様相を、記憶に留めておきたい。

●BOOK REVIEW
『研究は美味しい』加工技術開発の舞台裏―2
著者――鈴木　清教授（システム工学科）

本書は、二年前に刊行された『加工技術開発の舞台裏』（プライマリー社）の続編で、「テクニカルエッセイ」と銘打たれているように、いわば専門知識をエピソディックな話でくるんだ大変親しみ易い一書だ。

中身は、①「他人の成果」②「自分の研究」③「授業」④「国際会議紀行」⑤「研究の大切」の五章立て。むろん根幹は第二章で、これまで著者が取り組んできた「ダイヤモンドの高速摺動研磨」や「新砥石開発」などにまつわる興味深い話が記されている。

また第四章の「国際会議紀行」は、なかなかに楽しめる一章だ。目にしたこと、体験した小さな出来事のなかに研究者らしい見方がキラリ光っていて、旅行ガイドブックなどにはない、旅の小さなヒントが多くちりばめられている。

研究生活を楽しむ姿勢があふれている意味で、学生諸君に一読を奨めたい。

なお本書の定価は千円。購読希望の向きは、鈴木研究室に直接申し込むか、あるいは左記の版元に照会されたい。

＊「プライマリー社」電話〇三―三六二―六一一六三〇

人事異動

【退職】
（十一月三十一日付）
◆浦西　峰子（教務部教務課）

国外研修（十月～十二月）

◆柳沢　章教授（機械工学科）／出張先＝ベルギー（10／1～10／8）／目的＝ベカルト社との打合せ
◆加藤　重雄教授（システム工学科）／出張先＝アメリカ（10／4～10／10）／目的＝アメリカ精密工学会にて研究発表
◆原　利次教授（システム工学科）／出張先＝キプロス（10／10～10／18）／目的＝国際会議にて研究発表
◆森　真作教授（電気電子工学科）／出張先＝オーストラリア（10／18～10／24）／目的＝国際会議での研究発表
◆奥田　眞教育技術員（電気実験研究センター）／出張先＝タイ（10／28～10／30）／目的＝キングモンクット工科大学との共同研究
◆中村　洋一教授（システム工学科）／出張先＝アメリカ（10／30～11／9）／目的＝国際会議にて研究発表
◆星野　坦之教授（システム工学科）／出張先＝アメリカ（10／31～11／12）／目的＝国際会議にて研究発表
◆北久保　茂講師（システム工学科）／出張先、目的＝右に同じ
◆加藤　重雄教授（システム工学科）／出張先＝アメリカ（11／18～11／22）／目的＝アメリカ機械学会での論文発表
◆鈴木　敏正教授（システム工学科）／出張先＝アメリカ（11／29～12／9）／目的＝国際学会での研究発表
◆玉木　保教授（機械工学科）／出張先シンガポール（12／2～12／7）／目的＝国際会議での研究発表
◆村川　正夫教授（機械工学科）／出張先＝スウェーデン（12／2～12／8）／目的＝ウプサラ大学学位審査会
◆星野　坦之教授（システム工学科）／出張先＝タイ（12／11～12／16）／目的＝チュラロンコン大学での技術指導

TOWN & CAMPUS
宮代町国際交流
伊藤庸一教授（建築学科）

十一月二十二日、小雨のぱらつく宮代町進修館前から、町民と留学生を乗せた町のバスが小布施町を目指して出発した。初対面の参加者も多く、始めのうちは片言の日本語で話していた留学生も次第にうち解け、初日の善光寺見学、赤倉山荘での交流会、二日目の小布施見学と進むうち、日本語がスムーズになった。

日本人も、最初は怪しげな記憶をたどりながら善光寺参りや門前町、葛飾北斎におやき、栗わっぱなどを説明していたが、次第に記憶が戻り、改めて日本の伝統や文化を見なおしたようだ。

世界の歴史は異文化交流で飛躍的に発展してきた、などと難しい話を持ち出さなくても、外国人と話したり、未知の文化に触れあうことは新鮮な感動があり、刺激的である。そして、確実に友好の輪が広がる。

実際、このバスツアーをきっかけにして、十二月七日の五カ国の学生による駅伝参加後には、芋煮と韓国のチヂミを囲んだ交流会がもたれた。さらに、来年、一月十七日には国際交流パーティを盛り上げようと張りきっている。

国際交流は普段着のままであることがよい。それぞれが自分のできることを少しずつ持ち寄る、これが息の長い国際交流につながるこつだと思う。

編集後記

▼平成十年寅年。新年明けましておめでとうございます。昨年は、九十周年に係わる記念行事が目白押しで、あわただしい年でした。残るは、二月二十四日に予定されています「感性と工学」をテーマとした、技術教育国際フォーラムの開催です。まだ継続しています、募金の協賛同様、あわせてよろしくお願いします。

▼大学は、本年もいろいろな事を予定しています。この日工大通信で随時お知らせしていくことになりますが、これからさらに少子化が進むなか、本学は、国内外に誇れ、社会から評価されるエンジニアをいかに育成しうるかが、厳しく問われていることは、間違いありません。

そのためには、全学をあげて一層真摯なカリキュラム見直し等の議論の年になりそうです。百周年に向けて的確な方向に舵を定めながら、あらたな出発をしなければなりません。

（F）